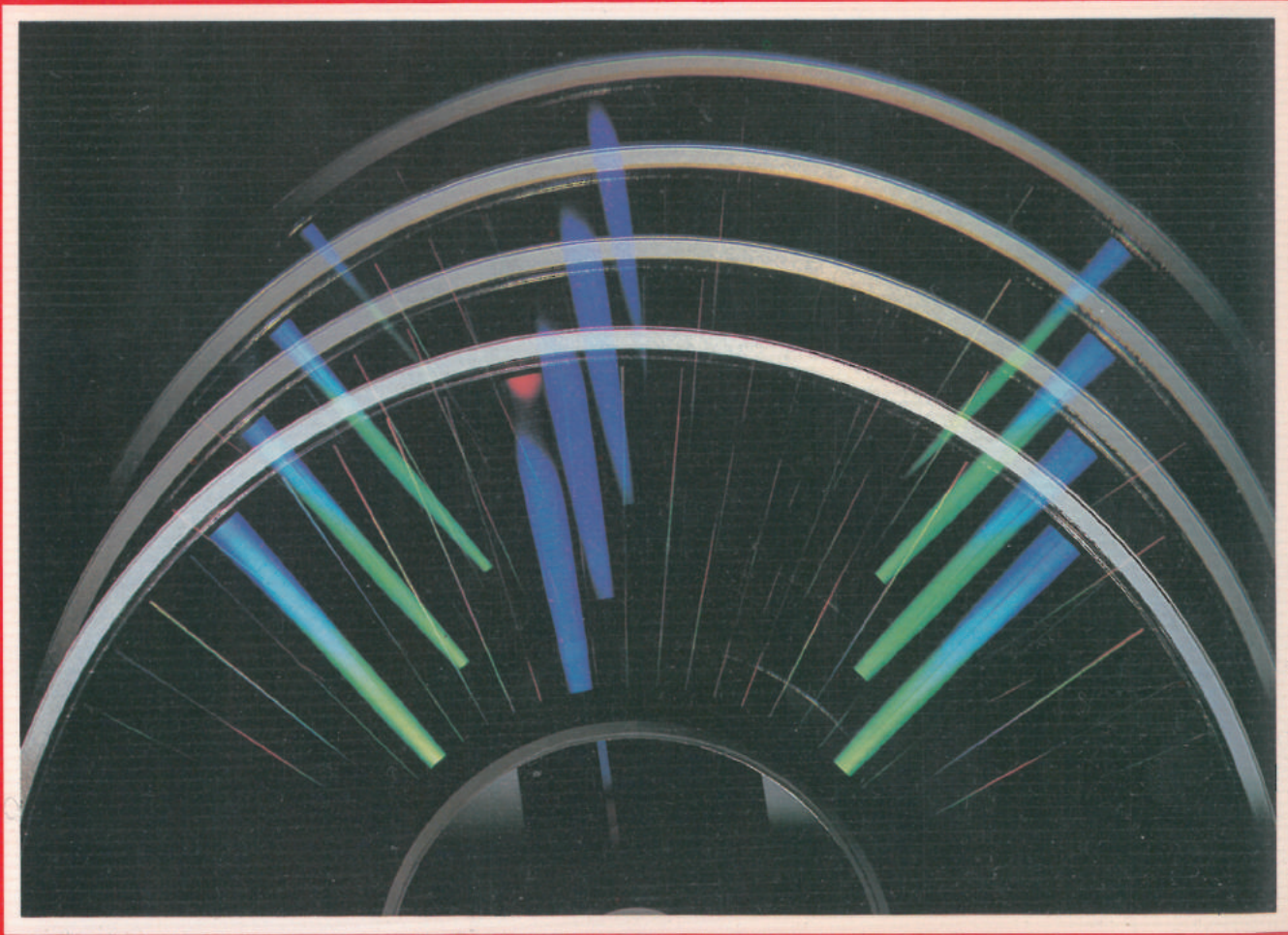


現代用語 1986 自由国民社版 の 基礎知識

別冊付録 世界若者データブック



戦後四〇年——暮らし再考のとき

これは、これまで四〇年間の変化を考えながら、今の私たちの生活の有り様を問い直してみようとする企画である。読者の方々に、その問い直しのきっかけを提供しようというのがねらいである。

四〇年。長い期間である。大きな変化が生じるのは当然である。

たとえば、明治維新からの四〇年間の生活を想い、

中流ニッポンの暮らし再考

中流の肖像

いまあらためて暮らしの素顔を語らる。

執筆——岸本重陳（横浜国立大学教授）

漫画——サトウサンペイ（漫画家）

起こしてみよう。明治元年には、佐幕と勤皇の

血なまぐさい抗争が終りきつていないが、明治四〇年

には、日清、日露の両戦争を戦って、日本はすでに

戦勝国となっている。前年には、鉄道国有法が公布され、

新橋神戸間には最急行のちの特急列車が走って

いる。そしてこの四〇年目年には、鉄道院が設置され、

鉄道営業キロ数は八〇〇〇キロに及び、旅客輸送

人員も一億四〇〇〇万人を超えている。

このような事例だけでも、資本主義の確立と発展の急速な歩みを見ることができよう。明治維新と同じように、「戦後」も新たな社会制度をとり入れてスタートした。第二次世界大戦という計り知れない犠牲を払って、ようやく日本社会にも欧米と同質の

根本的だったと言えるかもしれない。

しかし、いま私たちは暮らしのあり方にとまどって

いるのではあるまいか。とまどわざるを得ない大状況が

生起しているのではなからうか。たとえば、敗戦四〇年

目の二九八五年、日米経済摩擦は頂点に達し、アメリカ

では、日本の「防衛努力」の進捗状況に

ついて大統領が議会に報告することを

義務づけることまでまできている。

国内では、公共的経済活動のあり方を

めぐる新方向として、政府からは

国鉄の分割と民営化のスケジュールが

打ち出されている。

これらの例から、大状況の変化を推進

している大きな動輪の軸が見えて

来そうである。

そのような変化の予感のなか、人々の

生活意識もまた、新たなうねりを

見せようとしている。中流意識の定着

が言われる一方で、その崩壊を指摘

する声もあり、「階層消費」や「分衆」と

いった新語も登場してきた。私たちはいま、生活と

それを支える経済のあり方について、どのような自己

認識を持つべきであろうか。



民主主義が浸透するようになった。それによって

もたらされた活力によって、この間に日本は経済の

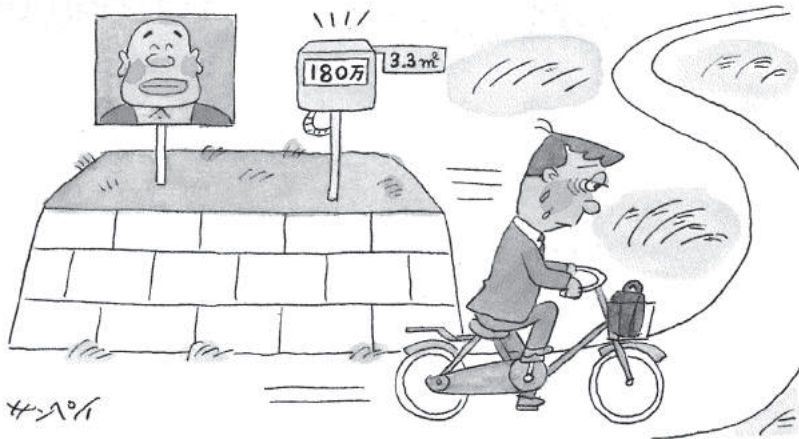
高度成長を遂げた。私たちの暮らしの変化は、明治

の四〇年間に比べても、はるかに急ピッチであり、

住む

焼

野原に黒焦げのトタン板をかき集めて立てられたバラック。農家の離れ小屋に一家八人がひしめて……。と、戦後の住風景を思い起せば、今日の住宅状況は、比較を絶する高級さである。ここに至るまでには、引揚者住宅があり、木造平家の公営賃貸住宅



があり、一九六〇年代半ばまでは人もうらやむ高嶺の花の公団住宅があった。やがて高度成長とともに、土地付き一戸建て住宅を求める人のための宅地造成ブーム、分譲住宅ブームが続いた。

日本人の土地付一戸建てへの執着は依然強いけれども、それは所詮かなわぬ夢の夢と悟った人も多く、やがて都会地では住宅の新規供給の中心がマンションということになってきたのが、現在である。

の間、確かに住宅の機能は高度化した。炊事場もトイレも共用という木賃アパートから、各戸別の炊事場とトイレ(それも洋式・水洗)を備えた公団住宅への進歩は大きかったし、アルミサッシと冷暖房機具の普及を経て今日のマンションは電子機器で武装するまでになっている。

こうした住宅設備の高度化をとまじながら、量の増大もめざましかった。

日本の住宅総戸数が世帯数を上回ったのが一九六八(昭和四十二年)、どの都道府県をとってもそうだという状況になったのは七三年。建設省は、量的な住宅問題は解決されたと胸を張った。

しかし、設備機能の高度化と、住宅の質とは別である。自動車交通の激しい幹線道路沿いでは、振動や騒音に耐えられない木造家屋がとりこわされて続々とマンションに変わって行く。しかし、鉄骨高層にしてみ

ても、窓を開ければ風より早く騒音と排気ガスが飛び込んでくる状況は変わらない。単体としての住居をとりまく環境は、必ずしもよくなってはいないのである。

それに何よりも、狭い。そして天井が低い。七〇年代末、E.Cが日本の住宅を「ウサギ小屋」とからかったのも当然である。

首都圏で、かろうじてサラリーマンの手が届くのは二五〇〇万円から、目をつぶって跳んでみても三〇〇〇万円までだろう。マンションなら平均で七〇平方メートル、土地は一戸建てなら平均して二三坪の土地に建坪が二六坪。いずれも、子供が成人するまで役に立つ広さとはいきかねる。それに、背の高くなった子供たちには、頭のつかえる階高である。

最近でもまだ全国の一割強の世帯が政府の定めた最低居住水準さえ満たしていない。

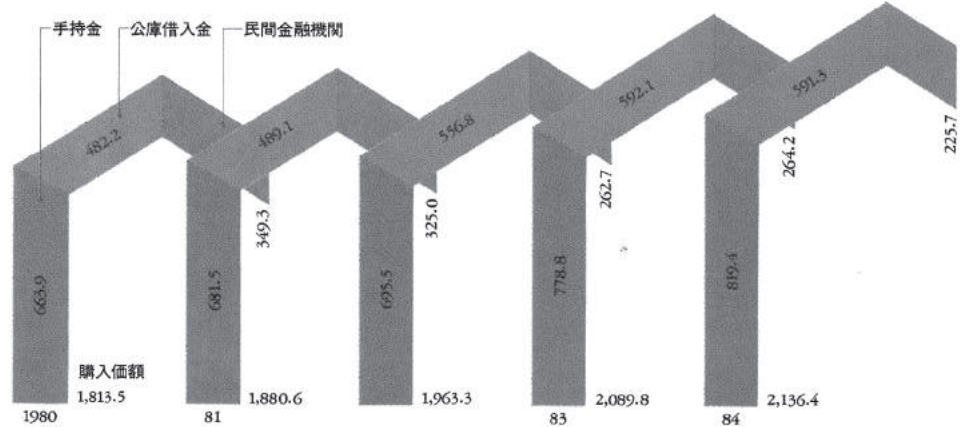
質を満たさぬ住宅の量を増やしても、量の増大もめざましかった。

日本人は一生住宅に追いつくのは当然である。日本人は一生住宅に追いつくのは当然である。日本人は一生住宅に追いつくのは当然である。

「生きかわり死にかわりして家を追う」である。日本の土地が狭いから、では理由にならない。

住宅を手に入れるために、日本人は異常なエネルギーを注がなければならぬ。こんなゆとりのない状態で、「中流」だと胸が張れるだろうか。

住宅購入価額と資金調達源



資料:住宅金融公庫調べ

育つね

このところ出生率の低下が続いている。

一九八四(昭和五九年)に生まれた赤ちゃんの数は、前年に比べて一万七〇〇〇人少なく、丙午を除くと七九年ぶりに一五〇万人を下回った。

親が、この世に生きて行くことは楽しい、意義もあると考えれば、自分の肉親とともにそれを分かちあいたいと考えるのではなからうか。

最初に生まれた子供がもし男の子なら、女の子も育てたいと思うだろうから、少なくとも二人の子供が生まれて当然だろう。しかし、いま、夫婦つまり二人の間から生まれてくる次の世代の数は、一・八一人(合計特殊出生率)ほどにとどまっている。

一人の女性が生涯に産む子供の平均数は「合計特殊出生率」で表わされる。

- 厚生省の資料からその推移を示す。
- 一九五〇(昭和二五年)年 三・六五
- 一九六五(昭和四〇)年 二・一四
- 一九七五(昭和五〇)年 一・九一
- 一九八四(昭和五九年)年 一・八一

なぜだろう。老後が社会福祉制度に託せて安心だからだろうか？ 高度経済成長末期の一九七〇年をようやく「福祉元年」と名づけ、福祉充実の方

向に進み出したとたん、「福祉はせいぜい、福祉は怠け者をつくる」

の大合唱が始まり、制度は後退に次ぐ後退を続けているのが現状なのだから、まさかそんなことはないだろう。

ひとつの大きな原因は、子供を育てることがある意味でこわいことになりつつあるためではないだろうか。

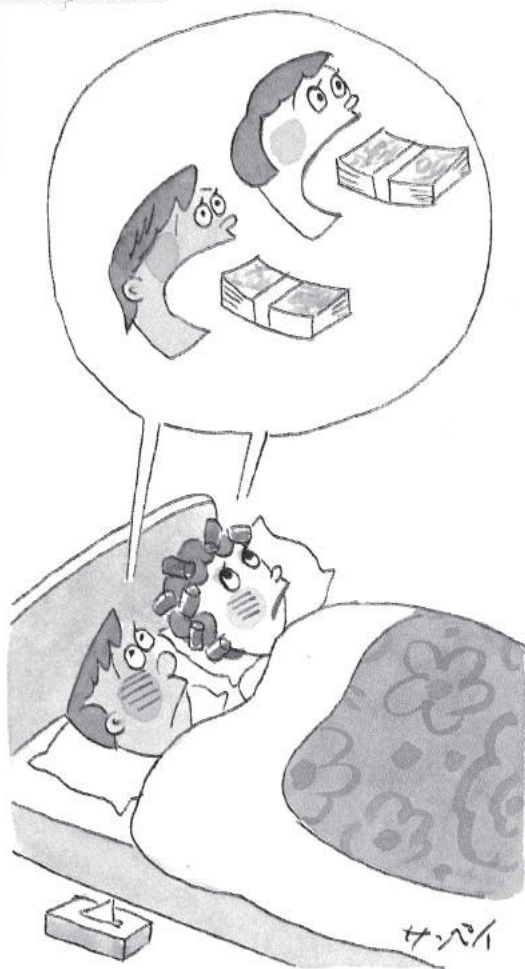
まず、極端なケースになるが、子供が受験世代になるころ、親は日々子供の暴力

力におびえる羽目になる。そしてまた、親が子の暴力におびえずにすんでも、子供は学校の「いじめ」に耐えかねているかもしれない。いじめられて泣く子よりも非行に走ってくれた方がマシなどとはもちろん言えはしない。

まっとうに育ってくれる「いい子」であったとしても、この高学歴時代、子供にかかる学費はものすごい。家庭教育費の中で四割を占めるのが家庭教師・学習塾費である(八三年、文部省調査)。

東京都の一九八三(昭和五八年)年の調査によると、小学五年生になると四七%の子供が学習塾に行っている。中学校の二年生では五七%に増える。学習塾以外の塾通いを含めるとさらにものすごい。最近では、塾に通わない子供は「未塾児」と呼ばれて珍しがられるほど。

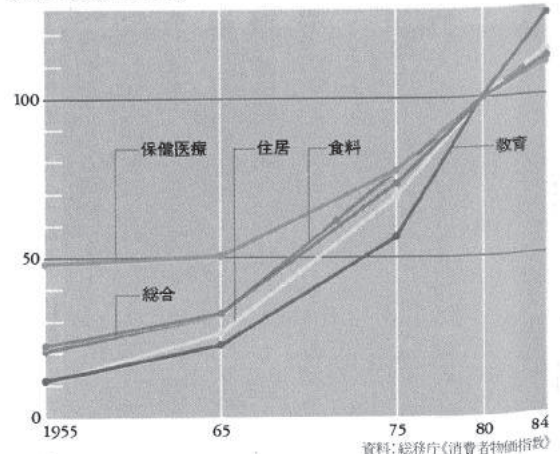
全国の家庭で、平均して月に一万二〇〇〇円が教育費にとられている。大学まで出しても、まだ子供には親を扶養する力はないから、老後に備えた貯金がある。それができるのは、せいぜい五〇歳前後からだろう。



国民の九割が「中流」を名乗るようになった。それにつれて、子育て目標も単純に「一流大学」「流企業」と、一元化されてしまったようである。

消費者物価指数

★1980年=100



子供を育てることは、確かにいつの時代でも精神的にこわく、経済的につらいことではあった。しかし今は、それが格段につらいことになっているのではないか。

その原因は多様だろう。自称中流の普及とともに、子育て目標が、一流高校、一流大学、一流企業、あるいは一流プロ選手と、何でも一流志向で一元化されて来た。当然、選別し差別する風潮が強まり、振り落された子は「落ちこぼれ」とさげすまれる。これまた当然に、さまざまな形態の逆反が始まる。その逆反に耐えうる教育原理も教育技術も、親には備わっていないのが現実である。

事々しく日の丸、君が代、父性原理などを原理として持出す前に、本当は坂口安吾の言葉をかみしめるべき時ではないだろうか。「親がなくても子が育つ、ではない。親があっても子が育つ。」

ニュー・サイエンス論を 探る用語集

東京大学教授
伊東俊太郎

●はじめに

最近ニュー・サイエンスなるものが、いろいろなところで、とりざたされるようになった。ニュー・サイエンスという帯つきの書物が数多く出版され、さまざまな雑誌においてもこのテーマで特集が組まれ、これに関する国際会議が日本で二つも開かれていた。

当然新聞紙上でも、この新しい知的ジャンルがとり上げられるようになり、ようやく一般の人の注目を浴びるところとなった。しかし一体このニュー・サイエンスの正体はどのようなものであり、その今日的な意味や役割はどんなところにあるのだろうか。

ニュー・エイジ運動 の科学的側面

ところでまず断っておくことは、この「ニュー・サイエンス」なる言葉は、実はわが国で

つくり出されたものであるという点である。この言葉で言い表わされているものに対応するアメリカでの新しい科学運動は、正確に云えば「ニュー・エイジ・サイエンス運動」とよばれているものであり、これはより一般的な「ニュー・エイジ運動」なるものの科学的側面を表わすものと称してよい。つまりそれは単に科学の領域のなかの新傾向というよりも、むしろ一つの新しい時代(エイジ)をつくり上げようとするいっそう広範な文明運動の一面面としてとら

えるのが正しいであろう。それゆえこの運動は、科学者の間だけの新しい科学の潮流というよりも、現代文明のあり方、我々人間の今後の生き方そのものに開わる、いっそう広い草の根的な市民運動の一環、その知識論的レベルへの反映とみることもできる。それは確かに量子力学や大脳生理学の最近の成果と結びついて展開されているが、あくまでもアカデミズムのなかにあり、これからの科学文明のあり方に深い関心をもつ科学ジャーナリストや知識人をまきこんだ一般市民層のなかに根強い人気をかち得ているものである。実際、多くの専門の科学者の間では、この派の人びとが行っている現代科学の解釈やそのパラダイム変換の要求は、むしろいかかわしいものとして映り、白眼視されているというのが、いつわらざる現状であろう。

もともとこのニュー・エイジ運動の根をたどってゆくと、一九六〇年代後半のカリフォルニアのヒッピーズにまで遡るわけである。ここにすでに近代の科学技術文明に対する批判と、同時に東洋の神秘主義の伝統に対する憧憬がみられた。こうした傾向を理論的に代表するものが、シオドア・ローザックの『対抗文化の思想』(ダイヤモンド社)であった。ここでは、当時勃発していた若者の異義申し立て「大学紛争」などをバックにし

ン・ギンズバーク、アラン・ワッツ、ポール・グッドマンらの思想がとり上げられていた。こうしたカリフォルニアの対抗文化(カウンター・カルチャー)の運動は、その後次第に下火になっていったが、それは消え去ったのではなく、ベトナム戦争を経て地下にもぐり、今度は科学の最前線の問題と結びつき、いっそう知的なよそおいをもつて復活し、近代科学、近代文明の批判となつてたち現われていると言えよう。

もつともわが国でニュー・サイエンスとよばれているものは、のちに述べるように、きわめて広範囲のものを含んでいるから、それをこうした系譜だけでしめくくることはできないが、ニュー・サイエンスの核が、アメリカのニュー・エイジ・サイエンス運動にあり、さらに後者はニュー・エイジ運動の一環であるとすれば、それはカリフォルニアにはじまって全米に及び、やがて世界に拡がったと言つてよいだろう。事実この種のニュー・サイエンスの理論的指導者には、カリフォルニアで知的活動を行った人々が多い。

カプラと タオ自然学

こうしたニュー・サイエンスのはしりをなし、今でもその中心人物の一人とみなされているのは、アメリカ在住の物理学者フリッチョフ・カプラである。彼が一九七五年に世に出した『タ

オ自然学』(工作舎)では、物質的世界は、クォークのような「基本的構成要素」に還元できるものではなく、宇宙は相互に関連し合った出来事のダイナミックスな織物であるとする「ブリストラップ理論」でこそ正しくとらえられるのだと主張する。そしてこうした現象の相互連関性と自己調和性をみとる点で、それは東洋の思想(仏教や道教の考え方に一致するものがあるとして、現代の量子物理学の第一線の問題がかえって東洋思想に通ずることを論じた。これは近代科学の機械論的要素主義を批判すると同時に、現代の素粒子物理学における全体論(ホーリズム)的考え方と東洋の神秘主義との並行性・類似性を強調したものであった。これまでも科学は東洋思想などとは無縁であり、いわんやその神秘主義などとはまさに対極にあるものとするのが通念であったから、現代科学の先端がむしろ東洋思想に通じ、これによって近代科学の旧パラダイムを克服できるというカプラの主張は、人びとに新鮮なショックを与え、この本は直ちに世界の一七カ国語に訳され、六〇万部も売りつくされる結果となった。そこには恐らく、人間の生との連関を失って巨大な一個のメガマシンと化し、公害や環境汚染を生み出してゆく現在の科学のあり方に対する不満が人々の心にわたかまっていたからであろうが、そこにはかつてのカリフォルニアにおける近代文明批判と東洋

中間社会を 探る用語集

ハーバード大学客員教授
青木 保

「中間社会」出現 の背景

まず、現代社会が迎えている問題を三つの点で考えてみたい。一つは、現代社会をおおう文明と文化の対立である。この対立がますます激化してゆく。いまやコミュニケーションの技術が発達して、本格的な地球大的コミュニケーションの時代に入ってきた。二〇世紀の文明は、近代科学技術を中核として発達した生活様式だととらえると、非常に普遍的あるいは一般的な性格がある。ニューヨークではやったものはすぐナイロビでもはやるし、東京ではやったものはすぐバンコクではやるというような画一化現象が、地球の隅々にまで及んでいく時代である。エチオピアの飢餓、飢饉の問題も我々がすぐこちらにいてそれを見てこれは人類が初めて経験する時代であると対応することが出来る。

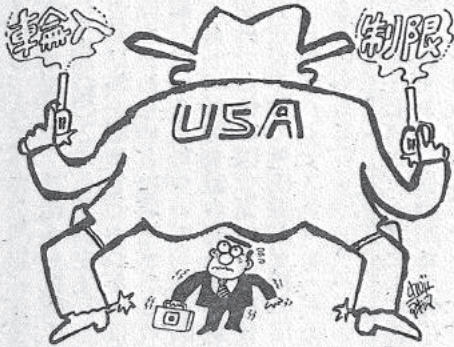
コミュニケーションが増大して何が問題になるかという点、その一つに人間同士が非常に細かく付き合う時代になってくる事実がある。文明は一見、人類の生活を画一化してゆくが、それはアフリカの小さな部族だとか、あるいは東南アジアの民族だとか、地図とか記録にほとんど載っていないような人たちにまで及ぶ。文明が及ぶと、それによって変化させられる事態が起こると同時に、彼らは自分の文化の危機を感じてそのアイデンティティの確立というところを感じだす。文明対文化という問題がいまあらためて生じてきている。文化は地域に根差した伝統中心の生活様式だから、これは非常に個別的な現象である。個別的な現象と普遍的な現象は、これまでどちらかという点部分的に接触していたが、地球大的コミュニケーションの時代になると、これが全面的に画一化対個別化という対立問題に置き換えられる。このパリエーションが——たとえば都市と地方の問題とか国家と民族の問題とか、集団と個人の問題とか、あるいはイデオロギーと土着思想の問題とか、いろいろなレベルでいま、世界中に広がってきた。これまではこういう問題は文化論とか思想論の問題だったが、現実的な抗争とか対立の問題としてとらえられるのである。その背後に文明と文化の大きな意味の対立があるのである。これが今後の世界を読む一つの大きな見方である。

もう一つは、外部と内部という問題。国際化時代と言われているが、実は国内の問題と国際化の問題は常に表裏一体をなしている。この点、文化摩擦から経済摩擦まで現在すべて大きな問題を生じさせている。文化がこれまでは、人間にとってはいわばポジティブな、肯定的な価値だったのが、今の段階になると、むしろ人間を分裂させる要因になってきた。文化が違ふからお互いに触れ合

われないとか、極端にいうと、政治、経済の問題はすべてコンピュータで処理できる——政治は妥協の問題、経済は計算・計量の問題だが、それに文化がかぶさると、すべて不透明になってしまう。文化というファクターが徐々にネガティブなファクターになりつつある。一方で文化は、人間とか民族集団とか、あるいは社会に対して非常に大きなアイデンティティの根拠を与えるが、同時にそれが外部を排除する点に注意すべきである。文化のシステムの内と外の関係が非常に大きな問題で、それが宗教とか民族、言語といったようなファクターによって実際に表現される。そこで問題になるのは、少数者の問題である。文化のシステムの中には必ず少数者が出てくる。これはまた一つのシステムの中に、たとえば異教徒がいたり異民族がいたりという形でもあるし、またもしそれがいない場合には、異人としての少数者をつくり出す。共同体というか社会の集団の動きとして、必ずそうした少数者をつくり出してくる。三番目がモノ/社会から記号社会へという変化が顕著になってきたことである。コミュニケーションの手段で注目すべきなのは近代社会は言語支配社会であったのに対して言葉に対する不信が出てきたことだ。不信ということは——言葉で表明していた時代は終わり、八〇年代はコミュニケーションが単に言葉ではなくて、たとえばグラフィックの問題とか、もちろん身振り手振りとか、身体的な表現とか、いわゆる非言語的な表現が大きな役割を果たす時代になった。コミュニケーションの多様化において両極性というのが出てくる。言葉にますます固執する部分と、固執しようとしないう部分が出てくる。それがどういう形で出るかというと、まずコミュニケーションの方法が象徴的コミュニケーションと技術的なコミュニケーションと、二つある。技術的なコミュニケーションは信号的なコミュニケーションと言つてもいい、オートマチックのみ込めるような形での目的性が非常にはっきりしているコミュニケーションである。これはだれでも理解できるし、また最も短縮した形でメッセージを送る手段である。これに対して象徴的コミュニケーションは、いわばモノと表現との間に関係が論理的には全くつかないコミュニケーションだから、その表現は全く恣意的に行われる傾向がある。自分がこういうことを表現したいという場合には詩人の言葉みたいなもので、それを理解するために非常に時間がかかる。それを知っている特定の集団しか分らない。そういう基本的には非常にプライベートなコミュニケーションの仕事が増大してくる。中間的なものはなくなつて、非常に分りにくい、勝手にやっているようなコミュニケーションの方法と、それから科学技術によってすぐコンピュータだと

経済摩擦用語の解説

大山 晃人 NHK解説委員



解説の角度

- 1985年アメリカ上院の対日報復決議が満場一致で可決されるなど、ジャパ・パッシング(日本たたき)が極めて激しくなっており、86年にかけて日本を対象とした保護主義法案が成立する危険性が強くなってきている。
- 自由貿易が日本繁栄の基盤であることに疑いはなく政府は85年7月市場開放行動計画(アクション・プログラム)を決めたが、海外

では、必要なのは結果だとか、口頭でない本当の行動を、など厳しい評価になっている。対日課徴金法案などが成立すれば、日本経済への大影響は避けられず、世界経済も混乱する可能性を秘めている。

●その点では今の状況は国難と言っても良い程であり、今後アメリカ景気の鈍化、失業率の上昇などがあれば事態は一層切迫しよう。市場開放、輸入促進などに失敗すれば、次は輸出に火がつくことになりかねず危険な状況である。

経済摩擦の現状

貿易摩擦

繊維、カラーテレビについて、八一年には自動車摩擦が、日米、日欧の二つの極で発生した。繊維やカラーテレビと違って一国の基幹産業である自動車の問題となったので、対日批判は激しさを増した。自動車については、対米一六八万台、ECへは国別の自主規制で一応結着をみたが、これが契機となって、農産品に対する日本市場の開放、関税撤廃に対する要請が強まり対象品目なき全般的なかつ構造的な摩擦に移行しようとしている。割安な日本製VTRなど家電製品、コンビニータ、産業用ロボットなどは、アメリカの景気回復とともに輸出の増大が考えられる。これに対して、アメリカからの輸入品は、所得弾力性の低い果物、食肉、繊維原料などが大きいウエイトを占めている以上、対米輸出超過は今後も続くと考えられる。そこでアメリカは、世界に冠たる金融、証券、保険の力をもつて、日本に対して金融・資本市場の開放を迫ってきた。

日米自動車問題

アメリカ国内での自動車の販売不振、その中で燃費効率の良い日本製の小型車の急増から一九七〇年代の終りから日米自動車摩擦が激化した。結果的に日本が一方的に輸出を自主規制する形で八年、一六八万台の規制を始めた。アメリカの自動車産業が回

り三年間一六八万台の規制が続いた。八四年はアメリカ自動車産業の回復に伴い一八五万台に増枠され、八五年、さらに日本政府はアメリカ政府の継続無用の意向と違って二三五万台と枠を増やした形での規制継続を決めた。議会には増枠への反発も強く今後も摩擦が起きそうである。またアメリカ市場での台数制限から日本車は稀少価値をうみ、大幅に値上げ、高級車化が起き、日本のメーカーにとってアメリカ市場はもっとも儲る市場になっている。一方、日本メーカーは台数制限とともに一斉にアメリカでの現地生産を進めており、数年後には現地生産分が一〇〇万台を超える見込みであり、日米間の自動車問題は数年後には大きく変化している可能性が強い。

世界小型車戦争

GMのワールドカー・Jカー計画は世界各地からコストの安い部品を集め、世界各地で生産をし日本車に対抗するコストの安い車を作ろうとする計画であった。しかし結果的には日本車のコストとは小型車で二〇〇ドルを上まわる結果となり、小型車戦争の第一ラウンドは一九八〇年代初め日本の圧勝に終わった。GMはこのため戦略を変更し、トヨタとの合併のNUMMI(New United Motor Manufacturing Inc.)で小型車製造のノウハウ

をめぐらし本体と切り離して新会社を設立した。労使協約も職務基準などを見直してUAW(アメリカ自動車労働組合)と合意に達し日本車に対抗できる低コストでの小型車作りをめざしている。この計画に投入される資金は五〇億(一兆二〇〇億円)といわれ、日本車に対抗できるコストの低下に成功すれば本格的な小型車戦争になる可能性をもっている。日本メーカーもアメリカでの現地生産がふえればコストが上昇することになり小型車戦争はこれまで以上の激しいものになりそうである。

ハイテク摩擦

産業の米とも石油ともいわれる超大規模集積回路(超LSI)を始めとして次世代のコンピュータ(第五世代コンピュータ)などでアメリカは日本産業の実力に警戒心をあらわにし始めている。半導体はUSTR(アメリカ通商代表部)への提訴に発展したし、その他の分野でも今後摩擦が頻発しそうな形勢である。これらの最先端技術は将来の産業構造を左右するものであり、この分野では日本に負けられないとの意向も強い。ハイテク摩擦には軍事用と民生用の技術が区分できない側面のものもあり問題をアメリカ側にはこれらのハイテク

この一年間の事件用語の解説



赤塚 行雄
社会評論家

解説の角度

●貧乏時代の犯罪は単純で、パンが欲しいために人を殺した。しかし今日のような豊かな時代の犯罪は極めて複雑。屈折した思いや疎外感を背景に、「スカッとしたい」という理由のために無差別殺人に走ったりするのだ。

●高度経済成長長期のころから、人物を物象化した打算的、虚無的な犯罪が目立ち始めてきたが、このころは、そうした犯罪に加え、さらに閉塞的な管理社会における衝動的な犯罪が増え始めてきた。

●「今、犯罪が面白い」と言ったら不謹慎に聞こえるかも知れないが、しかし時代と社会の歪みを鋭く切り裂いて見せるものは犯罪ではないのか。普段は自覚されない歪みが、犯罪を犯す人間の行為を媒介にして、はじめて可能になる。そういう意味では、私たちはもっと犯罪から何かを学びとるようにならないといけないだろう。

昭和六〇年の事件から

地下鉄千代田線車内暴力事件

昭和六〇年一月九日午後二時ごろ、満席の千代田線の電車内の座席に寝そべるようにしていた若者の足が何かの拍子で、そばに立っていたお年寄りの腰をけた。元会社役員で、今は定年後のセカンドライフを静かに送っている無職木村昌さん(六五)。思わず、振り向き「失礼な」と若者に注意したが、相手はいきなり立上って木村さんの顔をなぐりつけた。眼鏡は飛び、左目の上を切って血が飛び散り、木村さんはうずくまった。同じ車輦の中には約八〇人の乗客がいたが、この事件にかかわったのは木村さんの世話を買っててた中年の主婦一人だけ。前年の一九八四年末、ニ

ューヨークの地下鉄で暴力少年四人を撃ったバーナード・ゲッツの事件があつて、「ワル退治のヒーロー」として騒がれ出していたという事情もあつて、無法の若者をこのままにしていてよいのかという声が高まり、サウケイ新聞などが大きくこの事件を取り上げ、丸の内署は専従捜査班をつくって目撃者に名乗り出るよう呼びかけた。その結果、世田谷区の無職A(二六)が浮び上がり、同月二五日に逮捕された。もともと車内暴力問題は、警察が大捜査網を敷くほどのことではない。現場に居合わせた人々が注意すればすむ話だが、いつの間にか他人のことは関係ないという「無表情社会」になつてしまつたのが問題なのである。

「もういじめないでね」
自殺事件 昭和六〇年一月二一日夜、水戸市笠原町の飲食店員村口照子さん(二二)が首を刺して死んでいゝのが発見された。電柱の足かけに電気コードをつるし、自転車の上に立つて首をかけ、自転車を蹴るといふやり方で自殺したのだが、かばんの中に遺書があり、「もういじめないでね。マンガの本を棺の中に入れて下さい……」などと書かれてあつた。これまで幾度となく筆箱を盗まれたり、教科書に落書きをされたり、いやがらせやいじめがひどかったので、母親が担任の先生に相談したり、校長に電話でうたえたりしていたが、まともに取り合つてくれなかつた。自殺した当日も、母親の留守に六人の女の子が家にまで押しかけて江梨子さんをののしつたり、こづいたりしていたという。以前のいじめは学校の行き帰りで、先生

のいる場所や父兄のいる場所は安心だったが、このごろは学校の教室という公的空間がいじめの場となり、この事件のように家にまで上りこんでのいじめも目立つようになった。執拗、残忍、陰湿、しかも日常化し、自殺や仕返し、殺人事件もよく起るようになり、事態を憂慮して前年から警察庁もいじめの実態分析に乗り出すようになった。六〇年一月六月に警察が扱つたいじめに絡む事件は二七四件で、九二六人が補導されているが、その裾野がずっと広いということは言うまでもない。

暴力団山口組・一和会抗争 昭和六〇年一月二六日夜、大阪府吹田市内のマンションで、広域暴力団山口組の四代目組長になった竹中正久(五二)ほか二人が、対立する一和会系組員四人に襲われ射殺された。犯人のうち一人は事件の翌日逮捕され、残りの三人も大阪府警本部に出頭した。山口組は、五年七月、実力者の三代目組長田岡一雄が死亡してから四代目の座をめぐる内紛が起き、五七年から山本広組長代行派と竹中若頭派に二分して対立をみるようになった。五九年六月、故田岡組長の妻、フミ子未亡人の支持をうけ竹中若頭が四代目組長に決まるや、山本派は山口組から離脱し、新組織一和会を結成、山口組は分裂するに至る。両組織は勢力の拡大をめぐる激しい攻防を続けたが、故竹中正久・山口組四代目組長の実弟、山口組系竹中組相談役、竹中正(四八)が強引な一和会切崩しに動いた。

そのために山口組と一和会の勢力比は、はじめは四七〇〇対六〇〇〇人で一和会の方が優勢だったが、たちまちのうちに勢力は逆転し、六〇年一月には山

ワイン党よ落胆するなかれ!! 毎入りワインを売る大手メーカーばかりがワイン界ではない。勝沼のミニ醸造元原茂園は「シャスラー」、丸藤葡萄酒工場は「ルバイヤート」、シャトー勝沼は「カツヌマワイン」と、個性のかつ良心的なワインを製造販売。これならまんずまんず安心して飲める。

1985年・ 世相風俗デキゴト学

絵と文 畑田国男



①山口組・一和会抗争 山口組・竹中四代目組長らが一和会系組員に撃たれて死亡。両組の全面戦争の火ぶたが切っておとされた。日本のヤクザはマフィアと違い、地下にもぐらず普通の生活をしている。市街地に居を構え、報道のカメラを意識しながら戦い続けた。

②豊田商事事件・永野会長刺殺 豊田商事の純金まがい商法に義憤を感じた？二人の暴漢がマンションの自宅にいた永野会長をメッタ刺しにして殺した。刺客はドアの前にいた約二〇人の報道陣に向かって、「犯人はオレや。警察を呼べ」と大ミエを切った。

③日航ジャンボ機墜落事故 五二〇人の命を奪ったこの大惨事も連日マスコミで報道された。生還した四人の女性のうち、川上慶子ちゃんだけが「奇跡の少女」と呼ばれた。群がる報道陣に驚いた彼女は、「どうして？ 私はタレントじゃあないのに……」とつぶやいた。

④三浦和義、逮捕 ロス疑惑の「三浦さん」から、「さん」が取れた。噂の「Xデー」からマスコミ包囲の日々を経て挙行された逮捕劇はあらゆる角度から報道された。車の中で独占取材中のテレビ朝日・某ダイレクターが三浦に「警察手帳を確認したら」と忠告していた。

⑤劇場犯罪 マスコミは日本列島を「劇場」にした。出し物の選択に頭を使う必要はない。一億観客の興味は、いつも同じ事柄に集中するから。あとは、事件や事故をいかにショウアップすればよいか、この点だけを工夫すればよかった。ロングランが少ないのもこの劇場の特色である。

企業文化イベント

企業文化イベントは、一般に強く冠コン

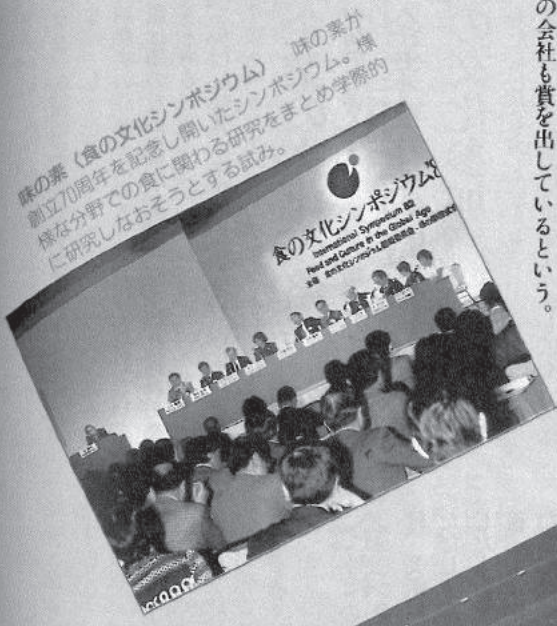
サート だった。クラシック、ポピュラ
ーを問わず、企業が助成して、
自社名あるいはブランド名を冠する演奏会は
花盛りである。日本ビクターのようにアメリ
カのジャズ・フェスティバルに協賛するところ
も現れた。なかでも観客動員の多い冠ミュー
ジカルが華やかである。

企業の主催または助成による催しは、音楽、
ミュージカル、演劇などステージ芸術から、
美術展、学術研究会議、シンポジウムなど多
様な方面に広がっ

てきた。これらが、企業文化イベ
ントと総称される。

企業主催の文化教室、セミナーも急激
に増加。さらに三井グループの「クロス・
アップ・ジャパン」、サントリー文化財団のシ
ンポジウム「日本の主張」など、海外での大
がかりな日本文化紹介企画も手がけるほどに
なっている。

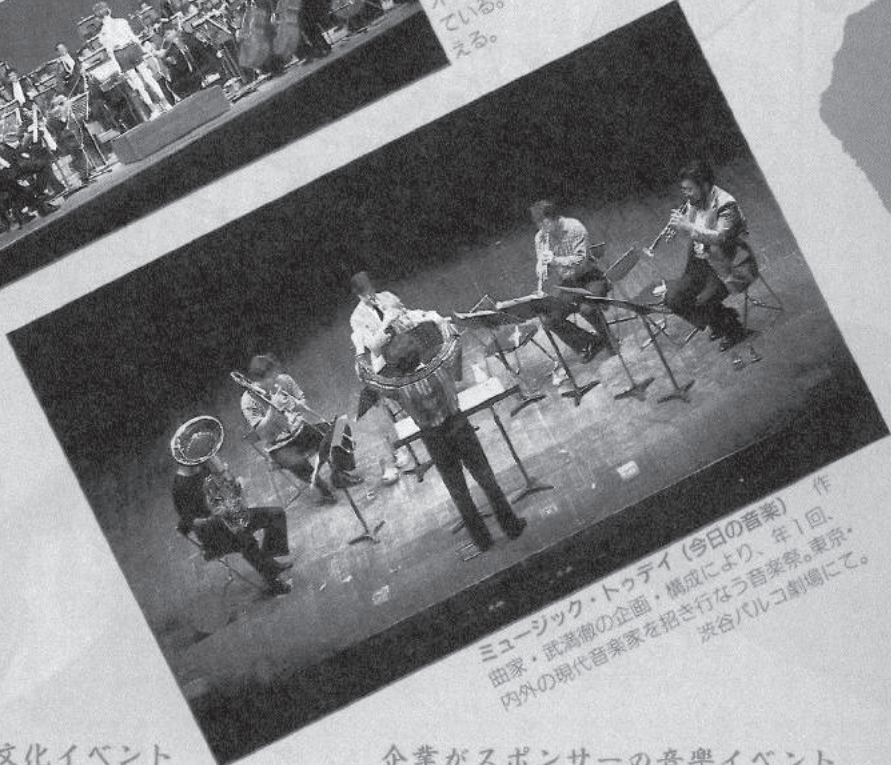
日本人が賞好む国民性を持ったためか、企業
や企業財団 企業賞 も挙げればきりがな
の設ける。最近ではサラ金
の会社も賞を出しているという。



味の素 (食の文化シンポジウム) 味の素が
創立70周年を記念し開いたシンポジウム。様
々な分野での食に関わる研究をまとめ学際的
に研究しなおそうとする試み。



トヨタ・コミュニティ・コンサート 「地域
の時代」を再興に、トヨタが日本アマチュア
オーケストラ連盟と提携、全国各地で実施し
ている。開催実績は昭和59年までに52回を数
える。



ミュージック・トゥデイ (今日の音楽) 作
曲家・武満徹の企画・構成により、年1回、
内外の現代音楽家を招き行なう音楽祭。東京・
渋谷パルコ劇場にて。

企業賞から
シンポジウムまで
コンサート、
様々な拡がる冠イベント

企業によるシンポジウム・文化イベント

名称	スポンサー企業・財団	開催年(昭和)
無年シンポジウム	野村證券	54年~
信託価値会議	日本IBM	55年~
日本の主張	サントリー文化財団	55年~57年
新軍の時代展	ミノルタカメラ	58年~60年
食の文化シンポジウム	味の素	56年~58年
クロス・アップ・ジャパン	三井グループ	58年~
朝日バルサロン	カネボウ・朝日新聞社	52年~
日本パロディカルチャー展	パルコ	52年~
オペレーション・ローリー	日本電装	59年~
企業トップマネジメントセミナー	三和銀行	58年
シンポジウム「21世紀の大都市像」	日本生命財団	60年
シンポジウム「親と子の絆」	日本生命財団	60年
国立十段歌名披露歌舞伎米国公演	マツダ	60年

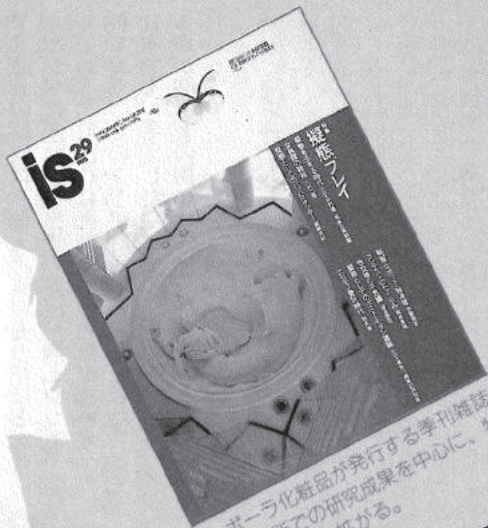
企業がスポンサーの音楽イベント

名称	スポンサー企業・財団	開催年(昭和)
新日鉄コンサート	新日本製鉄	30年~
ポピュラー・ソング・コンテスト	ヤマハ音楽振興会	44年~
ゴールドフレンド・コンサート	ネスル日本	48年~
北電ファミリー・コンサート	北海道電力	48年~
ミュージック・トゥデイ (今日の音楽)	西武セリンググループ	48年~
フレッシュ・サウンズ・コンテスト	日本コカ・コーラ	52年~
オーレックス・ジャズ・フェスティバル	東芝	55年~58年
オーレックス・クラシック・コンサート	東芝	57年~
トヨタ・コミュニティ・コンサート	トヨタ自動車	58年~
「作曲家の個性」	サントリー音楽財団	56年~
こどもの国キリン賞吹奏楽コンテスト	キリン記念財団	57年~
JVCニューポート・ジャズフェスティバル	日本ビクター	59年~
エイボン・タウン・コンサート	エイボン女性文化センター	60年~
トヨタ青少年ミュージックキャンプ	トヨタ自動車	60年~

K A N A M U J A R I O H I U N S R E

広報誌が

ユニークな編集姿勢を競い、
出版市場にまで進出



「is」 ポーラ化粧品が発行する季刊雑誌。ポーラ文化研究所での研究成果を中心に、特集テーマは文化全体に広がる。



劇団四季の遊戯社「慧星の使者」 認知の年に
民営化されたNTTがスポンサーとなり、有
学万博会場で1ヵ月間上演された若手人気
団の公演。出演は野田秀敏ほか。



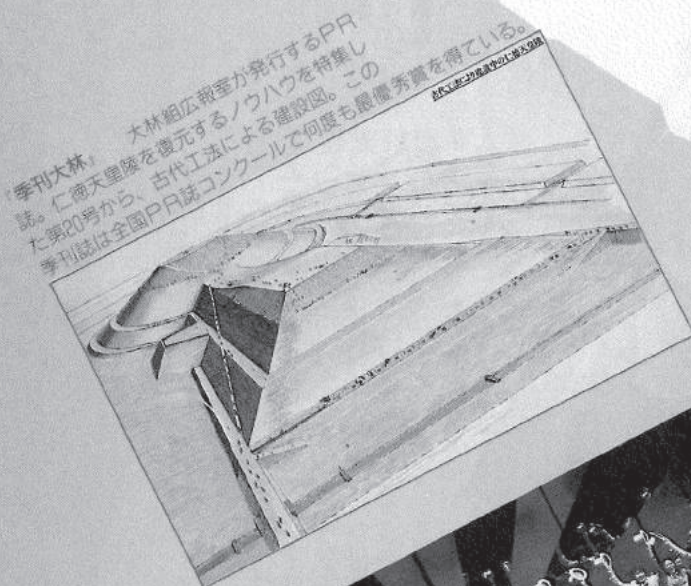
カネボウ ミセス童話大賞 雑誌「ミセス」
上で創作童話を募集。大賞作は文化出版
から出版される

出版

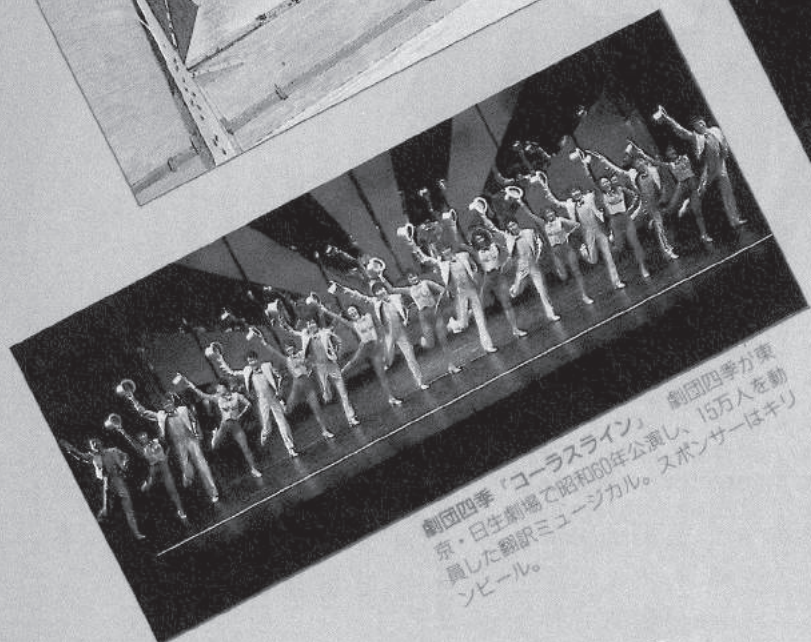
文化の分野にも、企業の進出はめざ
ましい。広報誌にしても、従来商品
宣伝で埋めつくされていたのが、学者、作家
の文化論などを掲載してクオリティーの高い
ものになってきた。大林組の「季刊大林」は、
前方後円墳を復元するノウハウを特集するな
ど、ユニークな編集で知られる。日商岩井の
「トレードピア」は、海外駐在員の生活体験
を比較文化の視点で毎号報告させている。同
編集部の手になる「英語は度胸」がベストセ
ラーになったのはあまりにも有名。
「文化的編集姿勢がなければ、広報誌は今や
広報誌と呼ばれない」との見方まである。

企業博物館、企業美術 館

建設もブームといつてよく、今や全国に
一〇〇館は下らない。従来はオーナーが
趣味で集めた物の展示館が多かったが、近年
は自社の製品など、産業文化財をもつばら収
容する傾向にある。



大林組広報室が発行するPR
誌。仁徳天皇廟を復元するノウハウを特集し
た第20号から、古代工法による建設図。この
季刊誌は全国PR誌コンクールで何度も最優秀賞を得ている。



劇団四季「コーラスライン」 劇団四季が東
京・日生劇場で昭和60年公演し、15万人を動
員した観劇ミュージカル。スポンサーはキリ
ンビール。

主な企業資料館・博物館

名称	場所	スポンサー企業	設立(昭和)
雪印乳業史料館	札幌市	雪印乳業	50年
東芝科学館	神奈川県川崎市	東芝	36年
内藤記念くすり博物館	岐阜県羽島郡	エーザイ	46年
ガス科学館	大阪府高石市	大阪ガス	58年
紙の博物館	東京都北区	王子製紙	24年
ザ・バック包装資料館	大阪府東大阪市	ザ・バック	58年
博物館明治村	愛知県犬山市	名古屋鉄道	40年
東海銀行貨幣資料館	名古屋市	東海銀行	36年
竹中大工道具館	神戸市	竹中工務店	59年
サントリーワイン博物館	山梨県北巨摩郡	サントリー	46年
サントリーウィスキー博物館	山梨県北巨摩郡	サントリー	54年
五十嵐健治記念洗濯資料館	東京都大田区	白洋舎	57年
IBM情報科学館THINKPOKET	東京都千代田区	日本IBM	59年

主な企業賞

名称	対象ジャンル	スポンサー企業・財団
現代詩花椿賞	詩	資生堂
ジローオペラ賞	オペラ	ジローレストラシステム
モービル児童文化賞	児童文化	モービル石油
明治村賞	学術・芸術	名古屋鉄道
東レ科学技術賞	科学	東レ科学振興会
本田賞	科学	本田財団
日本グラフィック展	デザイン	パルコ 全日空etc.
日付けのある詩ダイエー賞	詩歌	ダイエー
カネボウ・ミセス童話大賞	童話	カネボウ化粧品・文化出版
エイボン女性年度賞	女性の地位向上	エイボン女性文化センター
伝統文化ポーラ大賞	伝統文化	ポーラ伝統文化振興財団
サントリーミステリー大賞	ミステリー文学	サントリー文芸春秋・朝日放送
内藤記念科学振興賞	科学	内藤記念科学振興財団
共石創作童話	童話	共同石油
サントリー学芸賞	文化全般	サントリー文化財団